

第二の
ふるさとを
探して

第12話

時を醸す地へ

軽井沢

明治期、外国人宣教師によって避暑地として開かれて以来、別荘文化を育んできた軽井沢。過去から現在へと連なる時間の中で、何が受け継がれ、何が更新されているのか。軽井沢という土地が醸してきた豊かさの本質に迫る。

写真・五十嵐一晴 文・渡邊卓郎

軽井沢駅に降り立つと、あたり一帯は乳白色の霧に包まれていた。肌に触れる空気がしっとりとして心地良い。標高1000メートルほどの高原地帯に位置するこの地は、1年の三分の一近くが霧に包まれるという。その湿潤な気配こそが森の新緑を鮮やかに際立たせ、足元に広がる苔に深い生命力を与えている。

「現在の軽井沢らしい風景は、人の手によって作られたものなのです」。クリエイト軽井沢不動産代表取締役の林健太郎さんはそう語る。木々の乏しい湿地帯だったこの地を変えたのは、明治期に活躍した実業家・雨宮敬次郎だった。転地療養でこの地を訪れた雨宮は、有力な地主となり、植林事業に着手。約700万本の落葉松を植えたという。それが今日の軽井沢らしい景観の礎となったのだ。

この地を避暑地として見出した人物といえば、宣教師アレキサンダー・クロフト・シヨウがいる。清らかな風土に感動したシヨウは軽井沢を「屋根のない病院」と称え、自らも別荘を構えた。これを機に明治中期から、外国人宣教師や文人、政財界の重鎮が続々と集い、軽井沢特有の社交文化が花開いたのである。

1893年の碓氷線開通は、人々にとって軽井沢をより身近なものに変えた。そして、大正、昭和期に入ると芥川龍之介や川端康成ら文士たちが集い、昭和30、50年代には中間層にも広がる「別荘ブーム」が到来。大規模開発が進み、分譲地も拡大。そして、バブル崩壊後の落ち着きを経て、今、軽井沢の別荘文化は再び変化の時を迎えている。

昭和初期の別荘名建築が移築された『軽井沢タリアセン』を訪ねた。上段：旧『帝国ホテル』建設時に来日したアントニン・レーモンドが手がけた『軽井沢・夏の家』。紅殻色の外壁は建設当時の色を忠実に再現している。下段：W.M.ヴォーリズが設計した『睡鳩荘』の内部。『睡鳩荘』は帝国生命や三越の社長を務めた朝吹常吉の別荘として建てられ、のちに常吉の長女でフランス文学者の朝吹登水子が使用。軽井沢別荘建築史の最高峰と称される。



塩沢湖のほとりに佇む『睡鳩荘』。政財界人や文化人が集い、自然の中で思索し、交流する場として発展してきた軽井沢は、日本におけるリゾート文化の原点ともいえる。



軽井沢タリアセン

住所：長野県北佐久郡軽井沢町
大字長倉217
電話：0267-46-6161
<http://www.karuizawataliesin.com>



右：古くからの別荘地、「鹿島の森」の並木道。左：新緑の木立の中に静かに佇む小さな教会は、アレキサンダー・クロフト・ショーによって創設された『軽井沢ショー記念礼拝堂』。

「近年はリモートワークの普及により、若い経営者やIT関連のオーナー層の移住が顕著です。新しい層が入ってくることで、町の風景や価値が次なるステージへと更新されています」と林さんは分析する。また、若い富裕層以外に、外国人富裕層からも注目を集めているという。軽井沢が別荘地として選ばれてきたのには、根底に「保養の地」という土地の個性がある。かつての「屋根のない病院」という軽井沢を称えた言葉は、ウエルネスという文化へと受け継がれている。東京都心から新幹線でわずか1時間という距離にありながら、静けさの中で自分自身と向き合う地には、多くのウエルネス施設がある。その一つが、2022年に誕生した『ホテルインディゴ軽井沢』だ。「軽井沢には、緑豊かな自然が織り成す、良い『気』が満ちています。スパのトリートメントルームも木のぬくもりに溢れ、癒やしの時間を演出しています」マーケティングスペシャリストの花岡かおりさんはそう語る。軽井沢をモチーフにしたアートが点在する館内で、存在感を放つのが『ザ・スパ by HARNN』。名門スパブランドが提供する軽井沢の静寂に浸るトリートメントは、心身を深い休息へと誘ってくれる。

10年の時を醸す、ウイスキーの再誕

別荘文化が育んだ「上質を求める感性」は食文化にも息づく。今、大きな注目を集めているのが、軽井沢の地における「軽

井沢ウイスキー」再誕の知らせだ。

「軽井沢の冷涼な気候や埋蔵泥炭（ピート）の存在は、ウイスキーの本場スコットランドに通じるがあります」。「軽井沢ウイスキー」代表取締役の戸塚繁さんはそう語る。かつて高く評価されながらも閉鎖された旧『メルシャン軽井沢蒸留所』。その技術と志を継承しつつ、浅間山系の水や地元産の大麦を用いた、新たな挑戦が始まっている。

20年以上の準備期間を経て実現した軽井沢ウイスキー。戸塚さんは、最低でも10年の熟成期間を経なければ世に出さなという信念を貫く。10年の歳月が軽井沢の深い森と水、そして人々の情熱を、一杯の琥珀色に凝縮する。その時、軽井沢はまた一つ、上質な文化の層を纏うことだろう。



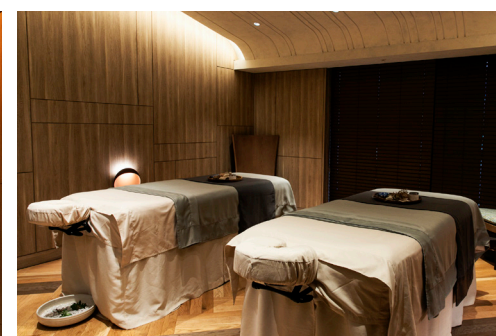
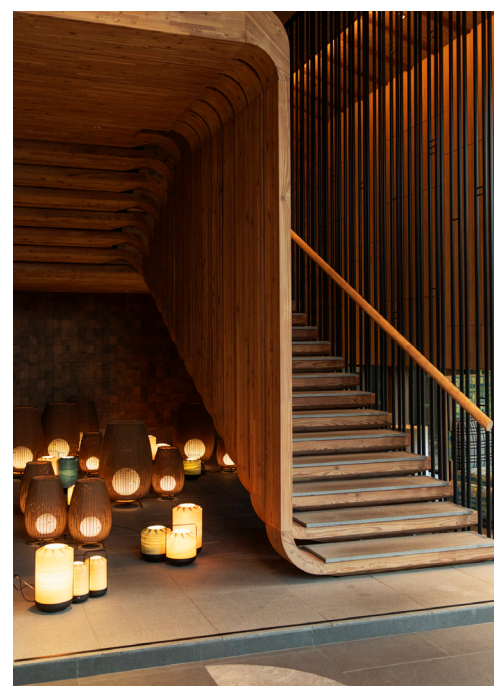
上段・右上：浅間山を水源とする湯川の源流域。同右下：自社農園での大麦の栽培も行う。同中：シェリー樽の中で原酒が熟成される。同左：スコットランド製のランタン型ポットスティル（単式蒸留器）が輝く。下段・右：代表の戸塚繁さん（右）は、創業370余年の戸塚酒造株式会社十六代目蔵元も務める。左は工場長の中里美行さん。同左：現在、カスク（樽）の単位で購入する「オーナーズカスク」の申し込みを受け付けている（支払いは口座振込のみ）。

軽井沢ウイスキー

住所：長野県北佐久郡軽井沢町発地2785-318
電話：0267-46-4939
<https://www.karuizawa-whisky.co.jp>

ホテルインディゴ軽井沢 ザ・スパ by HARNN

住所：長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉字屋敷添18-39
電話：0267-42-1110
<https://karuizawa.hotelindigo.com>



右：独創的なカクテルを創作するミクソロジストが作るスパ施術前のドリンクが心と身体を解きほぐしてくれる。中上：静寂に包まれるトリートメント室。『ザ・スパ by HARNN』は、「2024 WORLD LUXURY SPA AWARDS」において2部門を受賞。中下：トリートメントに用いるオイルは3種の中からセレクト。左：軽井沢を拓いた宣教師たちがランタンの灯で町を照らしていたという風習にない、ホテル館内でもランタンをモチーフとしたインテリアを取り入れている。